

# 日本史

## I

次の図と文章を読んで、後の問いに答えなさい。(問1から問4まですべてで400字以内)

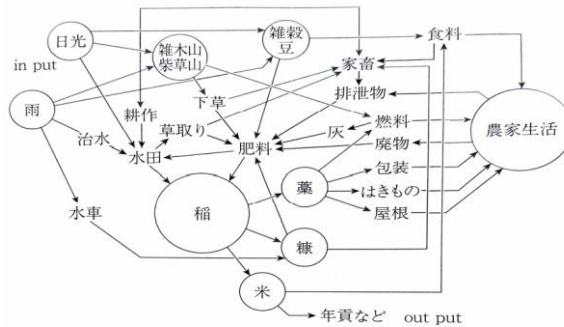


図 資源循環利用のクローズド・システム(原図：内田星美、原図の雑木林を雑木山・柴草山に修正)

草山景観に象徴される(a)近世農村のあり方は、産業技術史の視点から見ると世界に比類のない資源のクローズド・システムだったと評されている。(中略)このシステムにおける形骸からの資源(エネルギー)は、日光及び雨水である。雨水は河川や溜池から用水路を経て水田に供給され、日光のエネルギーによって稲が生育する。収穫された稲は藁、糠、米に分別されるが、すべて資源化された。(中略)田畑の地力を維持するために(b)肥料が重視された。人間や家畜の排泄物、刈り取った雑草、藁製品の廃物など、全てが肥料として田畑に投入された。薪や藁を燃料とした後の灰も貴重な肥料だった。(中略)このように農業社会として純化した近世農村は、日光と雨水という自然のインプットに依存する資源利用のクローズド・システムだった。そのうえで、この社会にも、系外との物資収支が存在した。図に「年貢など out put」とあるように、系外への流出としては、第一に年貢米として上納する米があげられる。都市に集住した武士集団や(c)町人集団の兵糧米や食料米として徴収される米は、系内消費率をかなり上回っていた。(中略)草肥を中心肥料にした近世農業の発達は、自然との関係のなかで別の側面でも(d)問題を抱え込むようになっていた。

※「シリーズ日本近世史② 村 百姓たちの近世 水本邦彦 岩波新書」より引用(問題作成の都合上、一部改変)

問1 下線部(a)について、近世農村の担っていた社会的役割を、村役人の果たした役割を説明しながら述べよ。

問2 下線部(b)について、江戸時代においては従来の草肥から金肥への急速な転換が生じたが、その金肥の使用は当時の農村の性格にどのような変化を及ぼしたか。金肥の具体例を2つ挙げながら説明せよ。

問3 下線部(c)について、当時の都市での町人が町人身分として認められるための条件を説明せよ。

問4 下線部(d)について、その問題として土砂災害が挙げられるが、それが起こった原因を説明せよ。

## II

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(問1から問4まですべてで400字以内)

全国で一斉に広がった米騒動は、都市の街頭に都市住民が躍り出た最も大規模な、実力を伴った都市社会運動であった。このような都市社会運動は、それまでも、東京や神戸で、日露講和反対や桂内閣打倒などの要求を掲げ、焼打ちや関係者宅、関係施設の襲撃というような散発的な形で存在した。これと対照的な米騒動の都市地理学的な特徴は、オフィス街、労働者街、郊外という同心円的な土地利用調整を生み出しつつあった資本主義の都市空間編制を、見事に世の中に知らせたところにある。労働運動も、次第に都市建造環境を舞台に利用し始めていた。(a)第1次世界大戦期の好況により一躍大規模化した重工業部門で職工階層が大量に育ち、大企業型の労働組合運動が、友愛会、そして後継の労働総同盟を中心に勢力を得てくる。都市型立地の機械・組立工場や金属工業を中心に、賃上げを始め、団体交渉権の獲得や労働時間の短縮をめぐる激しい階級闘争が大正後期に始まり、都市空間に溢れ出てきた。(中略)都市社会政策を穏健な路線をとった大企業中心の労働総同盟傘下の組合は、1930年代には企業組合化し、組合の運動方針は都市政策の文脈と結びつかないまま、工場内、企業内に収斂されつつあった。これに対し、資本主義体制と明確に対峙しはじめた左派組合は、1925年の(b)治安維持法制定以降、都市のインナーシティ、あるいは、新興の職工街を基盤に地下活動を始めた。この先鋭化した社会運動は、プロレタリア小説、とくに徳永直(c)『太陽のない街』や、佐多稲子『キャラメル工場から』などの描写に読み取れる。(中略)このように、1930年代には職工という労働者階層が都市に確固たる地位を築き上げた。これらの労働者たちは、比較的良質な長屋に居住し、いわゆる下層社会とは空間的にも明白に居住分化を行っていた。新たなホワイトカラー層の増大に伴い、より鋭い住み分けが、中間階層の郊外居住について見られるようになった。このことは、例えば昭和初期の今和次郎の、東京の本所深川から渋谷方面の市電車内の風俗記述に明瞭にうかがえる。(今[1971])。阪神間の郊外住宅は、私鉄沿線に広がり、都市の生活圏は一挙に広がった。点在する豊かな郊外住宅地と、密集する市街地の中の職工街、そして下層社会が居住する(d)「貧民窟」という、分極化した土地利用調整が、日本では1930年代に、大都市を中心に登場したのである。

※「経済・社会の地理学 グローバルに、ローカルに、考えそして行動しよう 有斐閣アルマ 水岡不二雄 編」より引用(問題作成の都合上、一部改変)

問1 下線部(a)について、第1次世界大戦が日本の貿易に及ぼした影響を説明せよ。

問2 下線部(b)について、この法律は1928年に改正されることになるが、それはどのような内容であったか説明せよ。さらに、その改正の問題点も説明せよ。

問3 下線部(c)について、その内容を説明せよ。

問4 下線部(d)について、横山源之助『日本の下層社会』と並ぶ貧民ルポルタージュの代表作である「最暗黒之東京」の著者を記せ。

### III

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(問1から問4まですべてで400字以内)

戦後の日本は、アメリカ主導の占領政策を経て、(a)サンフランシスコ講和条約でついに独立を果たしたが、その講和条約には、(b)単独講和であることなど、いくつもの問題点があった。また、経済面においては、(c)耐久消費財への民需を基盤とした高度経済成長により急激な経済成長を経験したものの、そこには国際収支の天井が存在し、経済成長に歯止めをかけなければならない時期も存在した。しかし、開放経済体制に移行した後は、国際競争力の高い日本製品の輸出が拡大し、国際収支の天井問題は無くなり、「ジャパン・アズ・ナンバーワン」と称されるようになった。しかし、開放経済体制に移行しようとした当時には、(d)「第二の黒船」という言葉が現れて不安感も惹起されてもいた。

- 問1 下線部(a)について、この講和条約は敗戦国の日本に対して「寛大な」講和条約であったといわれる。その理由を簡潔に説明せよ。
- 問2 下線部(b)について、当時の日本の世論は単独講和か全面講和かで二分されていた。全面講和論の理論的支柱として機能し、平和問題談話会が声明・論文などを発表した雑誌名を記せ。
- 問3 下線部(c)について、耐久消費財の普及を支えた社会経済的条件とは何か。説明せよ。
- 問4 下線部(d)について、「第二の黒船」は何を意味するのかを説明せよ。また、それに対応した日本企業の動きについても説明せよ。